

「グローバルインバランス 歴史からの教訓」

バリー・アイケングリーン(著)、畑瀬真理子・松林洋一(訳)

東洋経済新報社 2010年5月6日刊

本書は国際金融史の世界的権威である著者が国際金融の歴史的エピソードを資料や統計を使って説得的に分析したものである。通常のエconomic史家の著作と比べると、本書は現代経済への含意を強く意識しており、現在進行中の金融危機や国際金融制度を考える上でも大変参考になる。

第1章はブレトンウッズ体制の成立史とその経過をたどりながら、現在のグローバル・インバランスをどう評価するのか、またどう解決できるのかを論じている。著者は第二次大戦後のブレトンウッズ体制と現在の国際金融体制を比べると、類似点もあるが、多くの点で違いがあり、現在を新ブレトンウッズ体制と見る見方に反対している。

第2章は1971年に金とドルの兌換制度がどのような経緯で崩壊していったかを、金プール協定という制度に焦点を当てながら論じている。ここではグローバル・インバランスの下では国際協調の維持がいかに難しいかを明らかにしている。

第3章は訳者の一人である畑瀬真理子氏との共著であり、日本の固定相場制からの離脱のエピソードを現在の中国人民元とドルペッグからの離脱への含意として分析している。著者は日本が避けられない政策変更を先延ばしにしたことが問題の本質であったと解釈している。

第4章では20世紀前半に基軸通貨としてのポンドがドルに取って代わられたエピソードを紹介しながら、準備通貨としてドルからユーロへシフトしてしまうという見方を否定し、第二次大戦後の基軸通貨としてのドルの地位が例外的で、複数通貨が準備通貨として用いられる可能性の方が高いことを示している。

本書の中で著者が繰り返し強調しているのは、歴史から政策含意を導くにあたっては、その解釈は慎重でなければならないということである。この点に関しては多くの経済学者の安易な歴史解釈に対する戒めとなっており、全く同感である。

本書は、グローバル・インバランスの本質や、ギリシア問題に見られるようにユーロ圏から脱落する国が出る可能性について直接的な答えは与えてくれないが、考えるヒントは歴史的エピソードを通して随所に与えてくれている。